

寺町旧域発掘調査現地説明会資料

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

2015年11月28日

所在地：京都市上京区丸太町通河原町西入高島町（元京都市立春日小学校内）

調査期間：平成27年8月3日～平成28年3月31日

調査対象面積：1,880㎡（1区約1,380㎡、2区約500㎡）

はじめに

調査地は、寺町旧域にあたります。豊臣秀吉は天下統一後、京都市街の大改造に取りかかり、天正19年(1591)に京都の周囲に堀と土塁からなる「御土居」を巡らせました。またこの頃、鴨川沿いに作られた御土居の内側(西側)に、京内にあった寺院を集め、寺町が造成されました(図1)。江戸時代の絵図には、当地に「生蓮寺」や「専稱寺」の名があります。ところが寺町は宝永5年(1708)の大火の後、大きく改変されたことが文献史料からわかっています。調査地周辺の寺々は鴨東に移転し、跡地には町屋が形成されます。江戸時代後期の絵図には、当地に代々文章博士を務めた公家である高辻家の名が記されています(図2)。その後、明治10年(1877)には高辻家の跡地に番組小学校が伊勢屋町から移転し、のち京都市立春日小学校となりました。

発見した遺構と遺物

現在は1区の調査を行っています。見つかった遺構の時期は、概ねⅠ期(寺町形成期[1591年]から宝永の大火[1708年]まで)と、Ⅱ期(宝永の大火後から小学校開設まで)に分かれます。

Ⅰ期の遺構

寺院に伴う墓坑・柱列・礎敷き・井戸・石組みなどが見つかりました。調査区中央南寄りの東西柱列は生蓮寺と専稱寺の敷地境の塀、調査区西端の南北柱列は道路に併行して建てられた塀と考えられます。塀の一部は火災によって焼け落ちた状態で見つかりました。墓坑は調査区の南寄りに広がり、約10基を数えます。大きさは一辺60～80cmの四角形のものが多く、東西に並んで配置されています。棺はすべて木棺で、人骨の一部が残るものがあり、出土状況から座棺とみられます。また、調査区の北西部には径2～3cmの礫がびっしりと敷かれた舗装面があり、境内の参道として整備されていたようです。

後世の井戸の石組に一石五輪塔が使用されていたり、土坑から供養塔とみられる石碑の下部が出土したことから、宝永の大火の後、寺院で用いられていた石製品が転用されたり、投棄されたりしたことがわかります。一石五輪塔や墓石には戒名とともに年号が刻まれているものがあり、現在確認しているものの中で最も古いものは「慶長七年」(1602)、新しいものは「寛永十七年」(1640)の銘があり、寺の存続年代を示しています。

Ⅱ期の遺構

調査区全域で大火による廃材を捨てたごみ穴、調査区東部で高辻家屋敷に伴う土蔵・池3基・

浸透枡・井戸・石室・建物、調査区南部で町屋に伴う井戸・便所・鋳造遺構などを検出しました。

高辻家屋敷に伴う土蔵は南北4.4m、東西4.9m以上あり、溝状に地面を掘りくぼめ、基礎を堅固なものとしていました。庭園にあたる部分には漆喰で造られた池(図3)があり、3～4度、造り替えられていました。井戸には瓦積み井戸、石組井戸の他、階段付き井戸もあり、多種多様な陶磁器の他、伏見人形などが出土、陶磁器の中にはオランダ産の舶来品もありました。石室からは、ガラス製の簪なども出土しました。

町屋に伴う井戸は20基以上見つかり、石組の小型のものが多く、廃絶後に生活用具が一括して捨てられているものもありました。鋳造遺構の周辺では、鉄くずなどが多く出土することから、町屋の裏側に鋳造施設があったとみられます。

まとめ

今回の調査では、宝永の大火と思われる火災層の直下で寺院跡を検出しました(Ⅰ期)。古絵図に記載された生蓮寺と専稱寺の遺構と考えられ、両寺の敷地境を検出し、寺地の配置を明確にすることができました。今後、遺物の詳細な検討をもとに、墓地の埋葬方法や年代などを明らかにすることが必要です。また、宝永の大火後(Ⅱ期)の高辻家の屋敷跡では火災の度に造り替えが行われた建物や庭の様子を、調査区の南側では町屋が建ち並んでいた状況を明らかにすることができました。

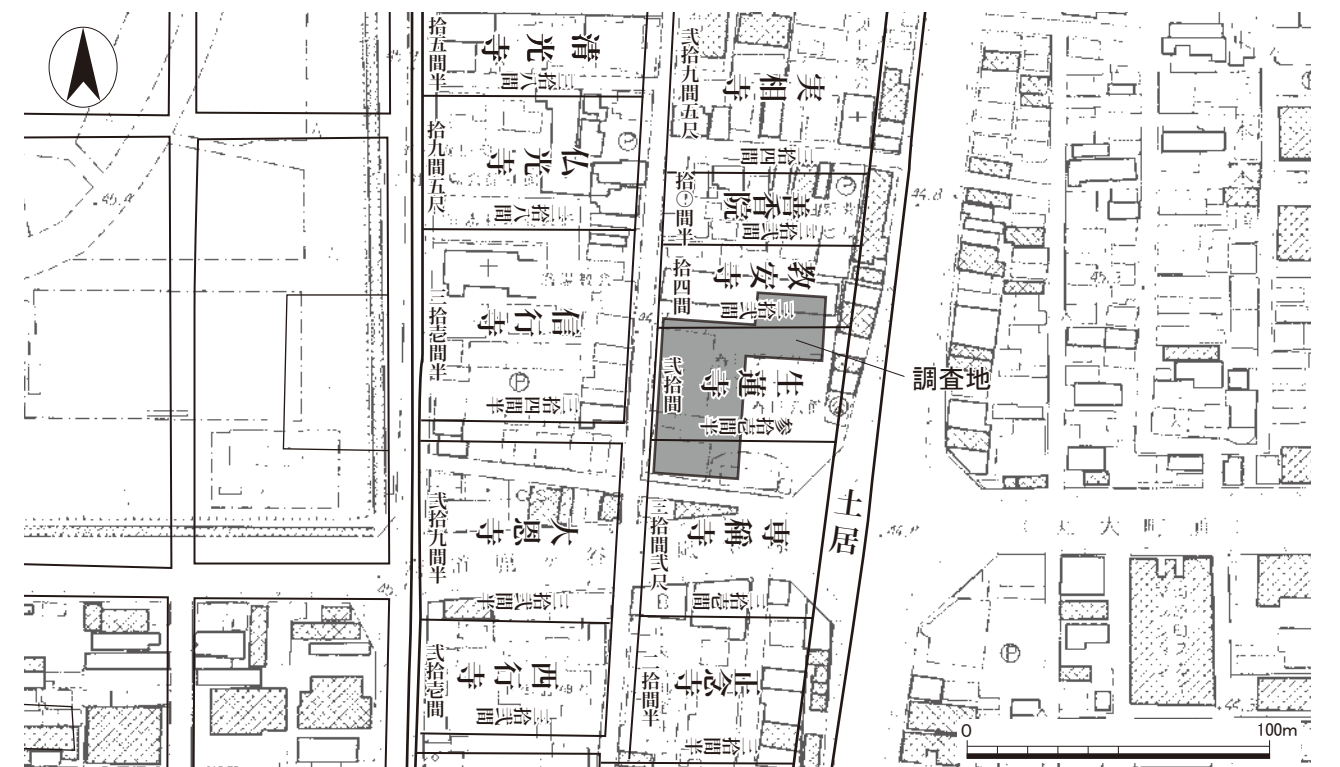


図1 現在の地図と寛永14年(1637)の古絵図を重ね合わせたもの(1:2,500)



①実測大絵図 元禄14年(1701)



②京大絵図 寛保元年(1741)

図2 古絵図から見た土地の変遷(各古絵図の縮尺は任意)

『慶長昭和京都地図集成:1611(慶長16)年~1940(昭和15)年』 柏書房 1994年より転載



図3 高辻家屋敷の池跡(18世紀後半、北西から)



図4 調査地の平面図(1:200)